

令和２年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

「自信を持ち前向きに生きる人」、「自立した人」、「社会に貢献できる人」を育成する学校

上記「めざす学校像」を実現し、健全で高潔な社会貢献できる生徒の育成をするために、以下の項目を中心に学校目標を定め、取組みを実施。

- 1 自己を確立し未来を切り開く力を育成。―――充実した学校生活を実現して成長し、社会に役立つ人―――
- 2 勉強がわかり学んだことを活用できる力を育成。―――学習活動を基本に据え、自信に溢れ前向きに生きる人―――
- 3 人とつながり自らを律する力を育成。―――他者を思いやり、地域から信頼される強くて優しい人―――
- 4 生徒の成長に喜びを見出し、向上心に溢れる教職員の育成。

2 中期的目標

1 自己を確立し未来を切り開く力を育成 → 学校生活の充実と規律ある高校生活を保障し、社会に役立つ人間を育成

（１）規律ある高校生活の実現

ア 当たり前に登校できる生徒を育成 社会人として欠席・遅刻は許されない

欠席件数を 7000 件以下（・令和 2 年は 9000 件・令和 3 年は 8000 件・令和 4 年は 7000 件以下へ）にする。

＊（H29 10470 件 H30 9255 件 R1 9742 件）

遅刻件数を 2600 件以下に（令和 2 年は 3000 件・令和 3 年は 2800 件・令和 4 年は 2600 件以下へ）にする。

＊（H29 3204 件 H30 3798 件 R1 3975 件）

イ ルールを守る意識の醸成 生徒理解に努め、厳しく鍛えるとともに暖かく寄り添う生徒指導を推進し、「なぜいけないのか」「どうすればよいのか」を納得させる指導を行う。

懲戒件数を 30 件以下にする。（令和 2 年は 35 件 令和 3 年は 30 件 令和 4 年は 30 件以下へ） ＊（H29 42 件 H30 32 件 R1 41 件）

（２）部活動と生徒会活動の活性化

ア 「元氣な学校づくり」 部活動活性化を考え、入部率の上昇をめざす。必要性の少ないアルバイト従事から部活動・生徒会活動・自己実現活動へと生徒の価値観を移行させる事を、全教職員が共通認識して指導し、部活動の加入率を上げる。放課後に生徒の声が響き渡る学校にする。

※ 3 年後には、部活動の入部率を現在の 30%から 35%に引き上げる。 ＊（H29 29% H30 30% R1 28%）

イ 学校行事で「人を育てる」 生徒会が中心となり生徒が自ら企画・立案・運営できる学校行事を設定し、「学校が楽しい」と実感しできるものにする。

※学校教育自己診断において、3 年後には「学校が楽しい」と答える生徒を 75%以上とする。（令和 2 年は 65%・令和 3 年は 70%・令和 4 年は 75%以上へ）
＊（H29 60% H30 60% R1 59%）

2 勉強が分かり学んだことを活用できる力を育成 → 【確かな学力の育成】を目ざし、自ら伸びる力の育成とわかる授業の創造

（１）新たな学びに対応したわかる授業の研究 新しい学習指導要領では主体的・対話的な深い学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善が求められる。「総合的な探究の時間」を中心に、令和 4 年の完全実施に向け研究活動を行う。

ア アクティブ・ラーニングの研究・実践 図書室の多目的化を踏まえ、グループ学習などの協働学習の研究を行い、主体的で対話的な深い学びの研究を行い、校内での情報共有の研修を行う。引き続き各年度 2 校の学校訪問と 1 回の研修を実施する。

イ キャリア・パスポートへの対応 生徒が学校内外の活動を記録し、自らの学びの蓄積を確認できる体制の確立と活用方法を研究する。

JAPAN e-Portfolio の連携も考慮し、情報収集を積極的行うとともに、生徒用の手帳の活用を行う。

「平野キャリアスタンダード」の推進と改革 「LHR」を柱にキャリア教育を展開し、生徒の進路を保障。生徒の進路意識、積極性、自立心を育む。

3 年後の進路決定率 95%をめざす。（令和 2 年は 92%・令和 3 年は 94%・令和 4 年は 95%） ＊（H29 87.5% H30 84.5% R1 84.5%）

3 人とつながり自らを律する力を育成 → 多様な人間関係の中でコミュニケーション能力を養成し、地域から信頼される強くて優しい人間を育成

（１）「ともに学び、ともに育つ」教育を推進し、地域とつながる平野高校を推進 大阪府における通級指導教室の取り組みに学び、「ともに学び、ともに育つ」教育の推進を推し進めるとともに、学校行事やビオトープ地域の人たちを学校に招くことで、交流の機会を増やし、共同作業や学習の機会を通して他者を認める力や認められる喜びを育てる。

ア 「ともに学びともに育つ」教育の推進 支援教育が共生社会の形成の基礎なることから、障がいのある生徒だけでなく全ての生徒に対し教育相談主担や SC・支援教育コーディネーターを中心に、校内支援体制を充実し、「困り感」を有する生徒の心情に寄り添い、個々の生徒支援に努める。また、ソーシャルワーカーとの連携を模索する。

イ 「地域とともに生徒を育てる」 ビオトープでの交流を中心に、地域とのつながりの中で、生徒を育てていくとともに平野高校の活動を、中学生や保護者にも広く知らせる。生徒会活動の更なる活性化の中で清掃活動、挨拶運動など、生徒が主体的に活動できる交流を模索する。地域から認められることにより自尊感情を高め、生徒の自信の醸成を図る。

（２）「違いを認め合い他者を理解できる豊かな心」を育む

ア 「豊かでたくましい人間性」のはぐくみ 人権尊重の社会づくりを進めるために、あらゆる教育活動を通じて人権教育を計画的・総合的に推進する。

イ 「グローバル人材の育成」 文化や習慣の違いを尊重する心をはぐくむとともに、コミュニケーション能力の育成をはかる。

※韓国大成一高校との「スタディツアー」を更に発展させ、学ばせたいこと、旅行行程、交流の在り方について本校独自のプログラムを策定し実施する。

4 生徒の成長に喜びを見出し、向上心に溢れる教職員の育成

（１）新たな教育課題と向き合い、社会の変化に対応できる「学び続ける」教職員の組織的・継続的な育成を図る。

「持続可能な教員力」の育成 変化に対応できる教員力を養うため、生徒をより深く理解する力を高め、校務のスキルアップを図るため、学校経営の中核を担うミドルリーダーや経験年数の少ない教員の育成を図る校内研修と OJT の充実する。

（２）「働き方改革」や健康管理の観点から、長時間勤務の一層の縮減を図る。教職員一人ひとりの意識改革を推進。

「教職員の長時間勤務の縮減」 一斉退庁日の設定や部活動休養日の明確化など、時間外労働縮減に向けた取組みの促進や勤務時間管理及び健康管理を徹底。

※時間外労働時間において、3 年後には 5 %以上削減とする。（令和 2 年は 3 %・令和 3 年は 4 %・令和 4 年は 5 %）

＊（H29 20269 時間 H30 17261 時間 R1 17097 時間）

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和２年 11 月実施分〕	学校運営協議会からの意見
生徒用アンケートでは 20 項目中 19 項目で改善している。唯一、「学校の図書館を利用したことがある。」が 7 ポイント減の 42%となった。1・2 年生は、総合的な探求の時間や LHR で全員が利用しているが、名称を図書ホールとしており、図書室との認識になっていない可能性がある。次年度は校内の呼称に直したい。 大きく改善した項目は、「学校の行事はみんなが楽しくおこなえるよう工夫されている」が 16 ポイント向上の 76%となっている。「文化祭や体育祭や学年行事などに積極的に取り組むことができる。」12 ポイント増の 81%。「学校で、授業以外の楽しみにしている活動がある。」12 ポイント増の 53%となった。新型コロナ対策を慎重に行い、行事等をできるだけ実施していることを理解してくれたのかもしれない。 保護者用アンケートでは、「学校はテストの得点だけでなく、子どもの努力や授業態度なども含め総合的に評価している。」90%、「学校では子どもの個人情報を守られている。」93%が高い評価を得ている。一方「授業参観や文化祭・体育祭など、学校がおこなわれる行事には参加したことがある。」が 48%と昨年より 11%も減少している。新型コロナウイルス対策として、入場制限などを実施したことが大きく響いている。 教職員用では、30 項目中 18 項目で肯定的評価が減少、9 項目で増加している。生徒に関わる項目での減少が目立つ。教職員の思いと現状との差が厳しい評価となっている。特に「本校の生徒は学校生活を楽しんでいる」が 7 ポイント減の 79%となっており、生徒自身が 8%増加しているのとは対照的ある。しかし、生徒自身の肯定的評価は 67%であることから、教職員は楽しめていないと判断し改善に取り組もうとしているとよみとれるのではないか。	第 1 回 令和 2 年 6 月 26 日 ・小学校にとっては、平野高校はかけがえのない存在。毎年、低学年が生活科の授業でお世話になっている。 ビオトープで 高校生の皆さんと交流し、子どもたちも喜んでいるため、できるなら、ずっと隣に平高があってほしい。 ・今の状況。厳しいのは確か。毎年開いてもらっている中高連絡会はありがたい 。それ以外にも、不登校気味の子の情報がほしい。一人も欠けることなく卒業できるように中学校でもサポートしたい。毎朝、中学校の校門前に立っている。自転車で元気に通っていく様子を見ている。 第 2 回 令和 2 年 10 月 14 日 ・学校でのコロナ対策はどうなっているか。福祉施設では面談室にパーテーションなどを設置している。消毒・手洗い・健康観察などは学校と同じ。 ・2 年生がビオトープに来て喜んでいた。 1 年生の時に高校生と交流したのを覚えており会えないのを残念に思っている。 ・大学入試が変わった。大学でも観点別評価を絞っていることもある。基礎学力も大事だが、3 観点をある程度意識して指導していくことを先取りしてみてはどうか。実態としては中学でもあまり進んでいない。大変だと思うが、一つの方法としてどうだろうか。 第 3 回 令和 3 年 2 月 12 日 ・オンライン授業が実施できるように撮影スタジオ整備することは大切です。 ・次年度の計画に、新型コロナウイルス感染拡大に対応することとして、中長期目標の第 3 番目に「全校休校に対応した教材づくり」は必要なことだと思う。 ・在校生や今後希望する生徒にとって魅力ある学校として取り組みを進めていただければと思います。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 自己を確立し未来を切り開く力を育成	(1) 規律ある高校生活の実現 (2) 部活動と生徒会活動の活性化	(1) ア 当たり前に登校できる生徒を育成 令和元年度は遅刻・欠席とも増加した。特に欠席の増加については、保護者と連携しながら、生徒自身の自覚を促す。 イ ルールを守る意識の醸成 生徒に寄り添う粘り強い指導で、自ら規律を守ることでできる生徒を育成する。 (2) ア 「元気な学校づくり」 部活動活性化を考え、入部率の上昇をめざす。必要性の少ないアルバイト従事から部活動・生徒会活動・自己実現活動へと生徒の価値観を移行させる事を、全教職員が共通認識して指導し、部活動の加入率を上げる。 ・ 個々のクラブ活動の成果を生徒全体で共有する広報活動を強化する イ 学校行事で「人を育てる」 生徒が自ら企画・立案・運営できる学校行事。 ・ 自ら企画・立案・運営できる設定を考え、「達成感・成就感」を体感できるものにする。 ・ 競技大会などの学年行事への生徒の取り組みに工夫	(1) ア 遅刻件数を 3000 件 欠席件数を 9000 件 (R1 遅刻 3975 件 欠席 9742 件) ・学校自己診断で「学校は家庭への連絡をきめ細かく行っている」83%以上 (R1 80%) イ 懲戒件数を 35 件 (R1 懲戒 41 件) (2) ア 学校生活の情報を学期に 2 回は HP に掲載する。 イ 自己診断で「学校が楽しい」と答える生徒を 65%以上(R1 :59%) ・「学校行事に積極的に参加している」75%(R1 :69%) ・「学校の行事はみんなが楽しくおこなえるように工夫されている」72% (R1 :60%) %	(1) ア 遅刻 3563 件 (3 月末) (△) 欠席 8554 件 (3 月末) (△) 授業日数を考慮しても、遅刻が一日当たり 21.2 から 20.8 に、欠席が 51.5 から 49.9 にわずかながら減少している。 ・学校自己診断で「学校は家庭への連絡をきめ細かく行っている」(84%) (◎) イ 3 月末現在 35 件で達成できそう。(○) 今年度は遅刻指導での訓告指導が多く、遅刻・欠席が特定の生徒に集中する傾向がみられる。家庭での支援が難しく生活習慣の立て直しができない。 (2) ア 現在 17 回学校生活にかかわる情報を掲載しており大幅達成している。(◎) 環境科学専門コースの取り組みを中心に情報報発信した。書道関係の表彰も多く本校の魅力を発信していくようになった。 イ ・「学校へ行くのが楽しい」67% (◎) ・「文化祭や体育祭や学年行事などに積極的に取り組むことができる。」81% (◎) ・「学校の行事はみんなが楽しくおこなえるように工夫されている。」76%。(○)

府立平野高等学校

2 勉強が 分 かり 学 ん だ と を 活 用 で き る 力 を 育 成	(1) 新たな学びに対応したわかる授業の研究 (2) キャリア教育の推進	(1) ア アクティブ・ラーニングの研究・実践 エンパワメントスクールやSSHなどの先進校の教育実践から学ぶため、学校訪問を2校以上のべ10人以上の教員で行う。 また、情報共有のための校内研修を行う イ キャリア・パスポートへの対応 情報収集に努めるため、各種研修会への参加に努めるとともに、生徒自らが記録を入力できる体制の検討会を開催する。 「平野キャリアスタンダード」の推進と改革 「総合的な探究の時間」を柱にキャリア教育を展開し、生徒の進路を保障。生徒の進路意識、積極性、自立心を育む。 ・1年次から進路情報を提供し、進路意識の向上を図る（活躍する卒業生や大人へのインタビューの企画・実施） ・中小企業家同友会との連携。生徒就労意識を育てる。 ・インターンシップや応募前職場見学の実施 ・3年生になるまでの早い時期に進路希望未定者と目的意識の薄い専門学校希望者へのアプローチを強化。 ・進路指導部と学年との連携した進学に向けての講習を実施し、学習チューター・学年主任・進路主担・進学主担・就職主担の連携を強化する。 ・自習室管理と自習の計画と運営 ・総合的な探究の時間を中心に、積極的に図書館を活用する方策を考える。（調べ学習など）	(1) ア ・学校訪問2校以上、校内研修の実施 ・中退者を35人以下にする。（R1は40人） イ 研修会参加3回 校内検討会2回 (2) ・進路決定率92% （R1は84.5%） ・就職一次内定率75% （R1は70.3%） ・図書館利用率55% （R1は49%）	(1) ア ・学校訪問は1校しかできなかった。 生徒の支援の在り方について校内研修を実施した。（△） ・中途退学者は3月末で27人、昨年同時期は40人であり、中途退学者は減少している。（◎） イ 研修自体がコロナ対策で開催されないことが多く参加できなかった。情報共有の検討会も開かれなかった。（―） (2) ・進路決定率は3月末89.9%（△） ・就職一次内定率は57%（△） 新型コロナウイルス対策で就職試験のスタートが1か月遅れることになり、直前の面接練習にさける放課後の時間が短くなってしまった。また、募集中止や募集減もあり、厳しい競争倍率となった。進学はほぼ例年通りの状況である。 学校幹旋就職を最後まであきらめず指導し、進路決定率を向上させたい。 ・図書館利用率は42%（△） 図書ホールは1年生2年生とも探究の時間やLHRで全員利用している。図書館と図書ホールが同じだと認識できていない。そのため来年度は質問を図書ホールと変更する。
3 人 と つ な が り 自 ら を 律 す る 力 を 育 成	(1) 「ともに学び、ともに育つ」教育を推進し、地域とつながり平野高校を推進 (2) 「違いを認め合い他者を理解できる豊かな心」を育む	(1) ア 「ともに学びともに育つ」教育の推進 高等学校での通級指導教室の制度化をふまえ、発達障がいをはじめ障がいのある生徒の「個別的教育支援計画」の引継を定着させ、高校での指導に活かす。また、教育相談主担やSC・支援教育コーディネーターを中心に、校内支援体制を充実し、「困り感」を有する生徒の心情に寄り添い、個々の生徒支援に努める。 イ 「地域とともに生徒を育てる」 ビオトープでの交流を中心に、地域とのつながりの中で、生徒を育てていく。生徒会活動の更なる活性化の中で清掃活動、挨拶運動など、生徒が主体的に活動できる交流を模索する。 ・地域清掃活動の実施 ・近隣小中学校との交流 ・授業や放課後の福祉施設交流 ・ひまわりプロジェクト ・幼稚園や地域住民との交流 ・地域のフェスタへの参加 ・中学生・保護者への広報の拡充 ・平野区との連携 (2) ア 「豊かでたくましい人間性」のはぐくみ 人権尊重の社会づくりを進めるために、あらゆる教育活動を通じて人権教育を計画的・総合的に推進する。 ・3年間を見据えた人権教育マップの作成。 イ 「グローバル人材の育成」 「地球規模で考えながら、自分の地域で活動する」をベースにし、卒業後の地域を担う人材となるため、文化や習慣の違いを尊重する心をはぐくむとともに、コミュニケーション能力の育成をはかる。 ・姉妹校である大成一高校との交流をさらに発展する。 ・交流の参加生徒による報告会、写真展示等を全校集会・文化祭に実施し、生徒の意識の向上を図る。	(1) ア 個別的教育支援計画の共有を教育相談委員会で行う。 ・外部講師を招聘し「発達障がい」を中心とした教員研修を行う。（新規） イ 学校教育自己診断（教員用）「学校は、保護者や地域の人々と接する機会を多く持っている。」65% （R1は42%） (2) ア 「人権、社会のルールについて学ぶ機会がある」を73%以上 （R1:70%） イ 大成一高校との交流会を実施する。 ・交流継続を目標とするが、ビデオレターの交換なども検討する。 ・のべ参加者20人以上	(1) ア ・松原高校との通級指導教室に関する研究において、対象となる生徒の状況把握の資料として用いた。（○） ・外部講師の用いた研修を実施するだけでなく、その後も授業観察をしていただき、アドバイスなどもいただいた。（◎） イ 「学校は、保護者や地域の人々と接する機会を多く持っている。」51%（△） 9ポイント向上しているが目標には達成せず。（素直に目標が高すぎました。） (2) ア 「人権、社会のルールについて学ぶ機会がある」78%（◎） 今年度は新型コロナウイルス感染症対策で全校休校があり、命の大切さや感染者や濃厚接触やの方や医療従事者への偏見や差別をなくそうと話す機会が多かったことが向上の要因と考えられる。 イ 今年度の訪問交流は中止であり、その後もビデオレターの交換などの提案をしたが実現せず。（△）

府立平野高等学校

4 生徒の成長に喜びを見出し、 向上心に溢れる教職員の育成	(1) 新たな教育課題と向き合い、社会の変化に対応できる「学び続ける」教職員の組織的・継続的な育成を図る (2) 「働き方改革」や健康管理の観点から、長時間勤務の一層の縮減を図る。教職員一人ひとりの意識改革を推進。	(1) 「持続可能な教員力」の育成 新しい学習指導要領に基づく教授方法や観点別評価などへの対応を行うとともに、今後 AI 化の進行など社会の変革に伴う教育課題の変化にも対応できるような、継続的に自ら教育課題と向き合い学ぶ教員力を育成する。 (2) 「教職員の長時間勤務の縮減」 一斉退庁日や部活動休養日を確実に実施し、時間外労働縮減に向けた取組みの促進や勤務時間管理及び健康管理を徹底。	(1) 教員から研修テーマを募集し、企画・運営を行う校内研修を実施する。 (2) 時間外労働時間において3%以上削減する。 (令和元年度 12 月末 17,261 時間)	(1) 部落問題についての歴史的な観点からの研修の提案があり実施したが、企画・運営は管理職となってしまった。(△) (2) 今年度 12 月末の時間外労働時間は 11,802 時間であり、約 32%減だが、4・5・6 月の休校を考えると一概に比較はできない。(◎) (例年 12 月まで 9 か月間あり、今年度 2.5 か月の休校期間は考えると、生徒の登校は 28%の減と大まかとらえてさらに 4%減っていることを考えると、時間外は減少していると言える。) 年度末 16,772 時間 (◎)
-------------------------------------	---	---	---	--